

熊谷市西城切通遺跡の土器と土偶

—前原儀久氏採集資料—

市 川 修

はじめに

近年における埼玉県内の考古学的動向として注目すべき点は、大宮台地以北において縄文時代後・晩期に形成された遺跡の報告事例が増加したことである。この動向を県域で捉えれば、北部から北西部にかけての範囲に含まれ、地理的に妻沼低地や加須低地として呼称される沖積低地から得られた調査成果になっている。これらの遺跡は、低地部に形成された自然堤防や埋没ローム台地に立地した地域環境で所在が明らかにされており、量的にまとまった出土遺物や住居跡等が検出事例になった具体的な状況において確認することができる。

従来、この地域では縄文期の考古情報は散発的であったが、こうした生活遺構等の検出と資料情報の増加によって、集落經營を基盤にした遺跡形成としての観点で地域的展開を把握することが可能になり、遺跡間の関係をはじめ地域動態等に関しても考えられるようになってきた。中でも出土土器が保有する様相的な方からは、編年研究の基準資料である大宮台地等の出土土器と比較研究が要請されており、広域的な影響関係等についても探求すべき状況が生じてきている。

本稿で取り上げる熊谷市（旧妻沼町）の西城切通遺跡は（註1）、この地域動向に連なった妻沼低地に展開する自然堤防上に立地しており、所在が明らかになったのは1969年のことである。旧妻沼町在住の郷土史家であった故前原儀久氏が確認された経緯を有するものであり（註2）、その状況に関与した考古遺物を「前原儀久氏採集資料」として位置づけ、当館における「考古資料の専門的な調査研究」事業において対象化を図るものである。

1 採集資料の経緯

遺跡の発見は、1969年3月に旧妻沼町大字西城字切通157番地先で行われた土取工事が端緒になつたものであり、土器の散乱した状況が前原氏に伝えられ、現地で集められた出土遺物が「前原儀久氏採集資料」である。採集資料はその後、私設されていた「妻沼地方郷土考古資料館」（註3）において、町内から出土した縄文時代の出土遺物として配列され、それを契機に資料的存在が明らかになったものである。そして、採集地先は埋蔵文化財包蔵地としての登載によって、周知化が図られた経緯についても知ることができる（註4）。

一方、資料情報として公になったのは1977年刊行の『妻沼町誌』（妻沼町1977）であり、採集資料の中から土器破片数点が掲載され、県域北部において安行期の出土遺物が出土していることが周知されたが、残念なことに主要遺物であった注口土器と土偶は未載録となり、採集内容の具体的提示には至らなかった。続いて公刊された『妻沼町の文化財』（妻沼町1981）では、指定文化財と共に「未指定ではあるが価値の高いと思われる」とした選定基準を通じ、採集資料に含まれた土偶2点が採択を受けており、資料写真の掲載によって紹介されることになった。

こうした経緯によって、縄文後期に位置する出土資料としての注目を受けてはいたが、公表範囲は一部に止まり、総体内容は不詳のままになった。展示資料としての出品や考古学的な手続きからの資料化も要請されてはいたが、氏の意向もあって難しい状況下に置かれてきた。こうした折、前

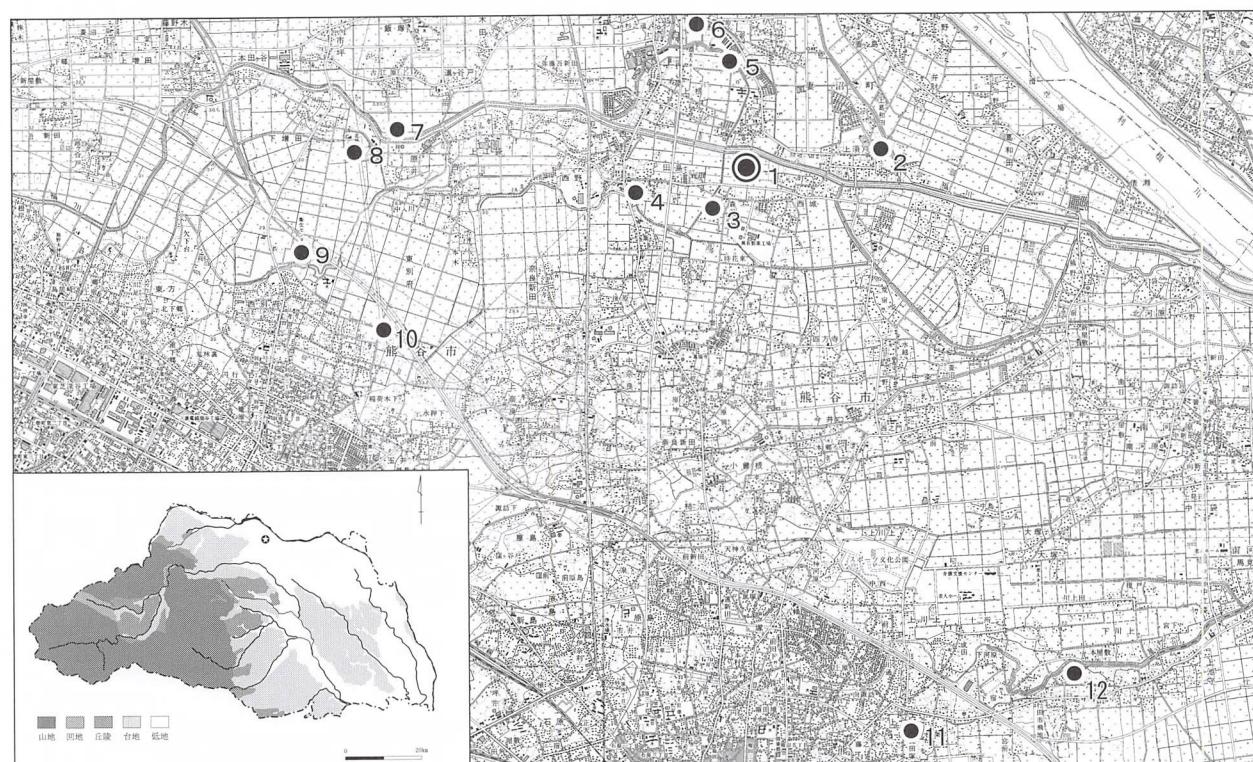
原氏は1982年に不慮の事故によって逝去され、郷土考古資料館に集められてきた町内からの出土資料は一括して妻沼町に寄贈されることになった。

その後、西城切通地区は土地改良事業が計画され、1988年に町教育委員会が発掘調査を実施することになった。この調査による成果を確認すれば（埼玉県1989）、「後期（安行1式）の住居跡2軒と土壙多数が検出され、後期を主体に晩期にかけての多量の遺物が出土し、周辺地域において類例の少ない遺跡」とした概要が提出されている。このことから、町所管になってきた採集資料も包括化した取扱いが望ましいと捉えてきたが、詳細は未報告となり、今日に至っている。

筆者は、埋蔵文化財の保護体制が未整備であった時代状況において、採集遺物となって存在する意味は大きいものと考える。さらに、考古学に傾注された前原氏が（註5）、地元に密着した活動と個人的努力によって地域を支え、考古学的普及にも貢献されていたことを地方史研究の上からも評価すべき必要性を認めるものである。本稿はその傍証として、妻沼地方郷土考古資料館の旧蔵資料であった考古資料を補足するものであり、収集範囲の一部ではあるが、西城切通遺跡からの採集資料を抽出し（註6）、その具体的な内容について確認することにしたい。

2 遺跡の位置と環境

遺跡が所在する妻沼低地は、群馬との県境になる利根川中流域の南岸に形成された沖積低地であり、西側では江南台地や櫛引台地と呼称される北武藏台地の崖線が境界になって展開している。この地域は、利根川および荒川の度重なる流路変遷の影響と堆積作用によって氾濫土に覆われており、低地部としての平坦地形を見せてはいるが、多くの自然堤防が形成されており、複雑な微高地形を景観的に確認することができる。現河川の流路形成としては北に小山川、南には福川が西からの東



第1図 位 置 図 (1/75,000)

流を見ることができ、地域的に大きく三区分して捉えられ、行政区では熊谷市域が中央に位置しており、北に深谷市と本庄市東部、南は行田市の北西部を含むものになっている。

こうした地域環境において西城切通遺跡を確認すれば、熊谷市北部に位置しており、妻沼低地の中央部北端に形成された自然堤防上に立地するものである。この自然堤防を現況的に確認すれば、福川右岸に接して東西方向に約600m、南北方向では約150mになって細長く伸びた微高地として見ることができ、その西端部付近を中心とした古地形態の集落遺跡として形成されたものであり、標高は28m、隣接する水田面との比高差は約1.3mである。

続いて、旧妻沼町で周知化されている縄文時代遺跡を『埼玉県遺跡地名表』(埼玉県1975)で確認すれば、本遺跡を含め6箇所が登載されており(註7)、その全てが後期に帰属する遺跡になっている。この中で遺物内容が明らかなものは、場違ヶ谷戸遺跡の出土資料である石棒は町誌に掲載されて知ることができ、下久保遺跡からの出土資料である堀之内2式土器も町誌に掲載されており、採集資料には土偶脚部を含むことが地名表の備考欄に記されている。江波遺跡は堀之内1式を主体にした土器と石器が前原氏によって採集されており、打製石斧と石棒は資料紹介を受けている(妻沼町1981)。これらの所在範囲は、本遺跡から半径約3km圏内で隣接する自然堤防に位置しており、先行時期に形成された遺跡として把握することができる。さらに、発掘調査に伴う出土遺物を確認すれば、福川上流に位置する道ヶ谷戸遺跡(市川ほか1981)からは、加曾利B式と高井東式に帰属する出土土器が報告されており、対岸の自然堤防には堀之内2式期の土壙と遺物が報告事例になった入川遺跡(金子1988)が形成されている。

熊谷市西部では、後期初頭の遺構と遺物が報告された寺東遺跡(吉野2000)が所在しており、荒川扇状地先端に位置する横間栗遺跡では、加曾利B式後半の出土土器が報告されている(鈴木1999)。さらに市域南部においては諫訪木遺跡の調査によって(黒坂2002・渡辺2007)、後期と晩期前半に帰属する住居跡等が検出されており、継続的な集落形成を確認することができ、谷部に形成されていた包含層からは、高井東式を主体にした豊富な遺物が出土し、本遺跡との関連性が認められる有力遺跡として捉えることも可能である。近接して所在する古宮遺跡(加藤2004)では、晩期の包含層が検出されており、北関東的な様相を示した出土資料を知ることもできる。

深谷市域では、晩期初頭の出土土器が報告された上敷免遺跡(村田1993)が福川上流に所在している。さらに谷部を挟んで北側に隣接した自然堤防には、上敷免北遺跡(市川ほか2000)が形成されており、称名寺期の住居跡と後期後半の土壙が検出され、高井東式と安行1式を主体にした土器が出土している。この遺跡は市教育委員会によっても隣接地点が調査されており(古池ほか1996)、狭い調査範囲ではあったが、高井東式と安行1式土器が出土した包含層が検出されている。低地部を挟んだ東側の自然堤防には本郷前東遺跡(新屋1992)と新屋敷東遺跡(新屋1992)が所在しており、後期初頭から晩期前半に帰属した住居跡等が確認されている。これらの遺跡は、地形的に区分されたものではあるが、相互に隣接した古地形態によって形成されたものであり、出土土器も同時期や先後型式を含んだ出土状況等を確認することができ、連結的な関係性を通じて拠点化した集落機能も考えられ、継続的に重層化した遺跡形成として捉えることもできる。さらに北方には、本庄台地の崖線に隣接した原ヶ谷戸遺跡(村田1993)が所在しており、後期中葉から晩期初頭の住居跡等が検出され、後期後半を主体にした多様な資料情報の報告によって、地域的に拠点化した機能も考えられる集落形成が確認されている。

一方、行田市域においては、大宮台地の北端に相当する埋没ローム台地上に形成された高畠遺跡が調査されており(註8)、高井東式と安行1式を主体にした遺物包含層と竪穴状遺構が検出されている。こうした県域北部における調査動向と該期の環境下において本遺跡が所在することを確認しておきたい。

3 資料概要と評価

採集されていた資料は、筆者が実見した当時、天箱換算では2箱程度の遺物量で、土器型式では加曾利B式から安行2式を確認することができ、高井東式の沈線文と無文土器を主体にしていた。挿図化した範囲は手元に残る主要なものであり、この他にも脚付の石皿や打製石斧等を含んでおり、遗漏した資料も存在している。以下において資料内容を確認する（註9）。

（1）土器（第2・3図）

高井東式土器（1～12、22）

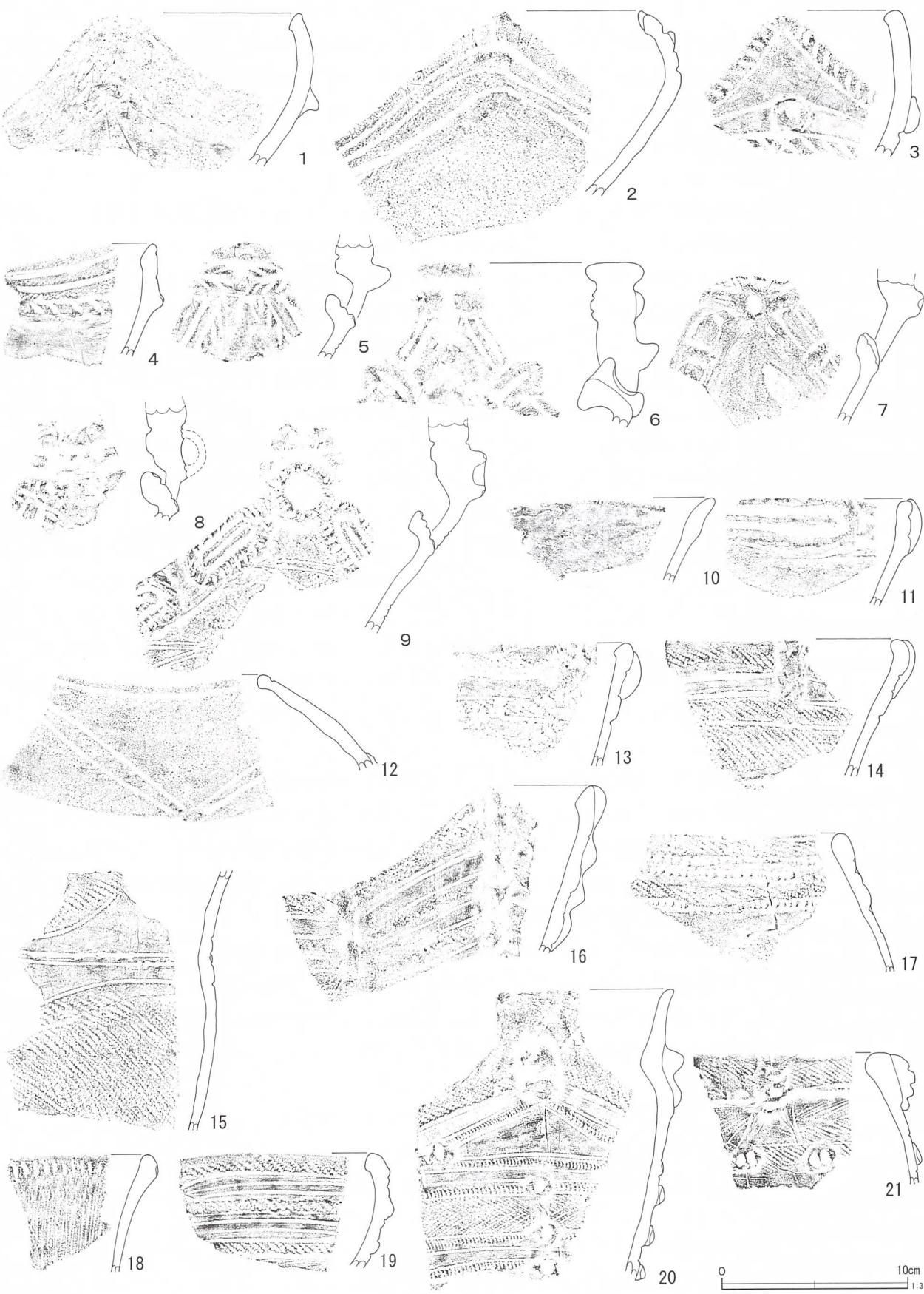
1は4単位の波状口縁深鉢である。緩やかな波頂部は内彎し、口縁部が屈折形状になって体部に移行する。口縁部には無節縄文を施しており、屈折部には下向きの弧状貼付文を置いている。こうした口縁部文様帶のあり方を、鈴木正博氏が明確にした高井東式の5段階区分で捉えれば（鈴木1980）、1式に相当するものであり、曾谷式の成立段階と連動する口縁部構成が確認できる。

2、3は波頂部が山形になった深鉢である。2は内彎が強く、無節縄文を地文に3条の沈線文が波底部の突起に接続している。波頂部にはイボ状突起を施し、直下の沈線間には弧状貼付文を置いており、体部には乱雜な斜行沈線を施している。3は口縁部が内折形態であり、口縁に連動する沈線と屈折部に沿った3条沈線で構成し、下位の沈線間にはボタン状貼付文を置いており、刻文列によって沈線を挟む文様を施している。2は3式、3は4式に相当する。

4～9は4単位の大波状口縁深鉢であり、波頂部の造形的突起を特徴にする。4は波底部に近い破片で、口縁部には無節縄文を地文に2条沈線を施し、屈折部隆帶には斜位の刻文列が巡っている。地文縄文と刻文の施文手法によって3式の段階である。5は突起基部に鉢巻状の隆帶と突起を配し、短く設けた口縁部文様に2条沈線が巡り、斜行させた刻文列を施し、体部には並列沈線が稻妻状に垂下している。口縁部文様になる2条沈線の端部は連結が認められず、後続段階とは区別できる施文手法になっている。6は突起基部の鉢巻状隆帶にスリットを設け、直下に弧状の貼付文を置いている。波頂部の両端にも沈線を附加した突起が近接しており、並列する沈線を施している。7は基部隆帶に円形の押捺文を施しており、波頂部両端に近接する縦位の貼付文が口縁部を分割し、沈線文は棒状の構成になっている。8と9は口縁部文様帶の構成が類似しており、8の波頂部直下には橋状突起になる剥落痕を見ることができ、9の波頂部基部には円環状の突起を置いている。口縁部文様帶には波頂底間を分割する橋円状の隆帶で構成しており、刻文列を附加した凹線状沈線の棒状化を見ることができ、体部には稻妻状の沈線文を施している。5～9は安行1式の併行段階に置くことができ、5～7は4ないし5式、8、9は5式段階に相当する。

10、11、22は平口縁深鉢であり、体部に括れ部を設けた形態のものである。10の口縁は肥厚気味で、強く外反する口縁部形態が特徴になっており、幅広い凹線状沈線文を施し、体部には斜行する擦痕が認められる。11は口縁部が直立し、口縁部には縦長の貼付文を置き、並列する沈線文の端部は連結によって棒状化している。22は体部の中程に緩い括れ部を設けた形態である。短い口縁は内折し、押捺を多段に加えた縦長の貼付文を置いており、口縁部には2条の浅い凹線状沈線文を施し、体部下半には成形時の擦痕が縦位方向に認められる。胎土は粗く、色調は黒褐色である。これらは凹線状沈線の構成によって5式段階に位置するものである。

12は加曾利B式からの系譜を引いた算盤玉状になる体部形態の鉢である。沈線文によって幅広の横帯区画を設け、区画内の2条沈線が鋸歯状に展開し、接点にはボタン状貼付文を置いており、無節縄文を施文している。2条沈線の文様構成によって2式段階に相当する。



第2図 土 器 (1)

24、25は台付鉢である。24は平口縁で短い口縁部は直立気味であり、体部中程に括れ部を設け、膨らんだ下半部に移行する。口縁部には並列した幅広の凹線状沈線が一巡し、口縁部以下は無文である。器面全体に丁寧な横方向のナデ調整を施し、鉢部の内面も同様に仕上げている。25は台部であり、収縮した接合部から接地部までは緩く開いた形態で、器面には成形時の砂粒移動に伴う斜行した擦痕が認められ、台部内面には成形痕を残している。この器種は高井東式段階で組成化するものである。24は凹線状沈線文によって5式段階、25は4もしくは5式段階に相当する。

安行1式土器（13～19、23）

13～15、23は平口縁深鉢である。13は口縁部文様帯を狭く設け、直下には無文帯を見る事ができ、安行1式の成立段階に相当する。14は瘤状貼付文の直下に弧線文が連結しない構成になっている。15は大きな弧線文を体部に施し、括れ部には平行沈線間に刺突列を施している。これらは、基準資料である茨城県岩井貝塚の出土土器より古い段階に位置している。23は体部が直線的に移行する形態である。口縁は扁平で直立し、口縁部には縦長の突起を2段に設けており、その直下にも押捺を施した瘤状貼付文を置いている。体部は地文繩文であり、口縁直下の沈線が区画を設け、弧状化した沈線文が連動する。体部では並列した沈線が下向きの連弧文を2段で構成し、下位の弧線文は分割的に展開しており、沈線間は磨り消されている。胎土は粗い砂粒を含み、色調は暗褐色である。この平口縁で括れの無い形態のものは曾谷式から継承された器形であり、口縁部文様帯と弧線文も同様に捉えることができ、興味深い弧線文様の構成になっている。

16は波状口縁深鉢で波頂部が山形になった形態である。口縁の波頂部には瘤状貼付文を4段に置いており、帶繩文間には直線化した沈線を施している。14とは同一段階に位置するものである。

17は平口縁深鉢で体部上半に最大径をもつ形態である。帶繩文の下には刺突文を施しており、繩文充填の弧線文を施文している。18は台付鉢の口縁部であり、口縁には刻文が連続し、体部には規則的で細かい条線文が縦方向に施文され、粗製土器とは区別することができる。19は浅鉢の内彎した口縁部で、帶繩文の隆起を高く設けた手法を示し、無文域には3条沈線を施文している。

安行2式土器（20、21）

20は波状口縁深鉢である。魚尾状の波頂部直下には嘴状の突起を置いており、三角内帯文の直下と括れ部直上に無文帯を設けた頸部文様で構成する。区画内には矢羽状沈線を施文しており、並列させた縦位沈線が分割し、連結部の上下には押捺を加えた瘤状突起を置いている。この構成を鈴木加津子氏が提示された安行2式の細別区分において確認すれば（鈴木1985）、頸部文様の多段化と無文帯を設けることからIb期の直前段階に相当するものである。

21は口縁部が内彎した形態の平口縁深鉢である。口縁部の帶繩文を幅広く設け、截痕を施す縦長の突起を貼付し、下位の帶繩文が区画する。区画内には矢羽状沈線文を施し、背合わせの弧状沈線文を附加しており、豚鼻状の突起が貼付され、20とは相違した手法が認められる。文様構成からはIb期に位置するものであり、採集範囲では下限期を示す資料になっている。

瘤付土器（26～31）

東北地方南部との関係が認められる資料を瘤付土器として一括する。これらは搬入もしくは在地化したあり方の中で捉えられるものであるが、注口土器の一部には、高井東系列で理解すべき資料も含んでいる。個々の土器との関係や出土状況等は不詳であり、資料的構成は収集資料を特徴づける存在になっている。

26は内折の強い肩部形状が特徴であり、浅い上げ底の底部に移行する注口土器である。肩部は無文域が想定され、肩部と体部上半に沈線を施して区画帯を設けており、大きなボタン状の貼付文を置いて沈線文が連結している。胎土は粗い砂粒を含み、色調は暗褐色である。

この資料は、大きな貼付文と3条沈線、粗い胎土の特徴から高井東式に帰属する可能性も認められ、

そうなれば3式に相当し、安行1式の直前段階に位置するものである。先行段階の注口土器には、体部が球形になる形態が主体を占めており、文様構成も肩部から体部下半にかけて構成するものが多い。肩部形態の特徴である低く直線化した関連資料には、破片資料ではあるが深谷市上敷免北遺跡の包含層から出土した注口土器（市川2000：第21図21）を抽出することができ、口頸部形態の参考例になっており、無節縄文と瘤状貼付文によって高井東2式の位置が考えられる。

27は注口土器の肩部から体部に相当する破片である。断面形態からは頸部と体部下半が均等な形状を見ることができ、肩部は無文帶を構成し、屈折部には瘤状貼付文を配置しており、沈線区画の縄文帶を設けている。丁寧な器面調整が認められ、胎土は粗い砂粒を含み、色調は黄褐色である。

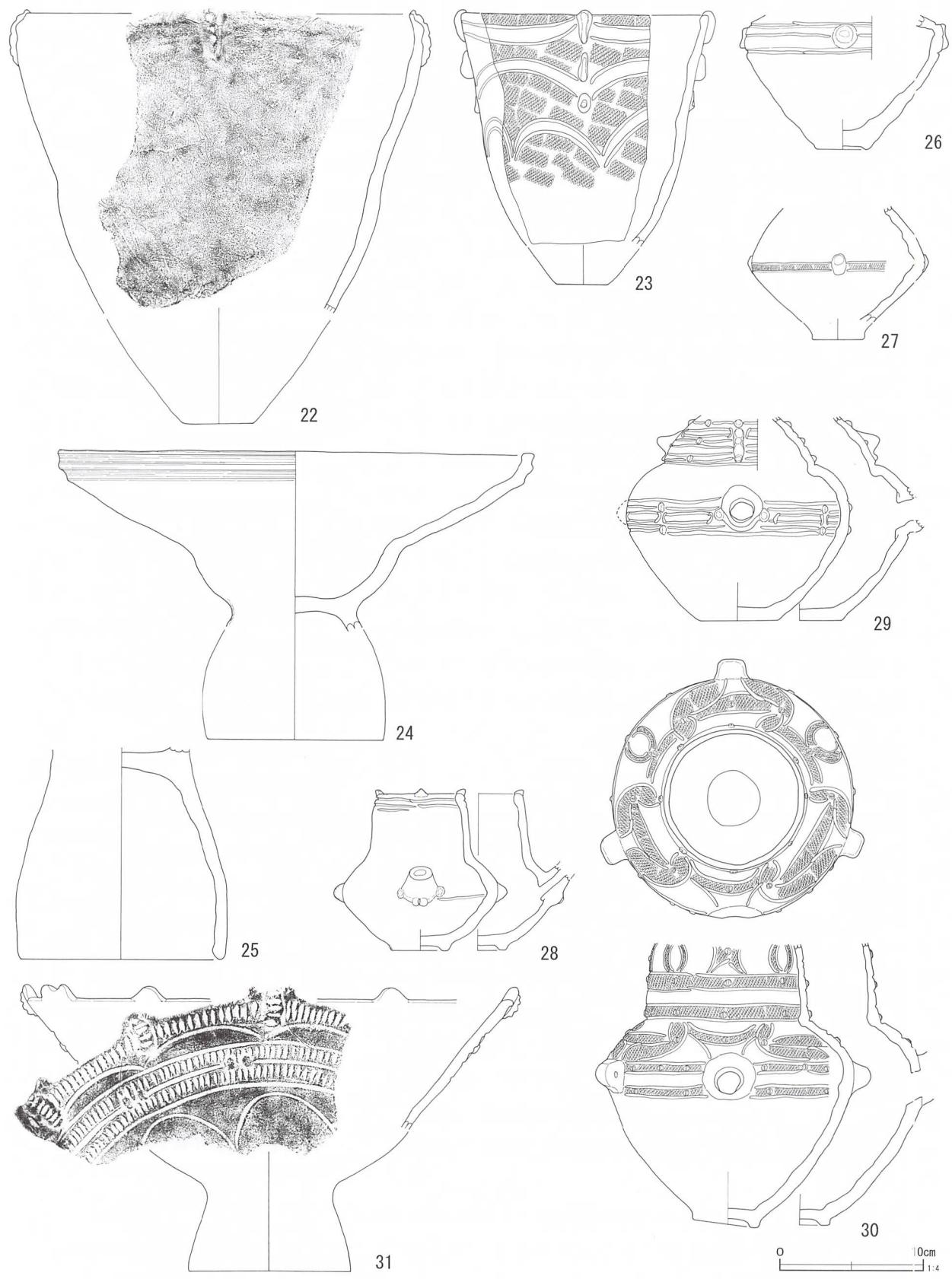
28は注口部先端を欠損するが、ほぼ完形品である。内彎気味の口縁部形態を示しており、肩部からは曲線的で、上げ底になった底部に移行する。口縁にはイボ状突起を4箇所に置いており、多条化した沈線によって口縁部文様帯を構成する。体部の屈折部にも瘤状突起を3箇所に施し、図化範囲に限り沈線文を設けている。注口基部の両端には瘤状突起、直下には分割した貼付文を施している。丁寧な器面調整が認められ、胎土は粗い砂粒を含み、色調は赤褐色である。本例は口縁部に施した多条沈線の存在によって、編年位置は安行1式に併行することが考えられる。

29は注口土器であり、口縁部、頸部、体部で構成する形態である。口縁部を欠失するが、内彎気味の頸部から肩部の曲線化を経て平底の底部に移行している。文様帯は頸部と体部上半に無文帶を挟んで設け、多条化した沈線文の構成で展開している。頸部の文様帯には穿孔を設けた山状突起を4箇所に配置し、その中間にはイボ状の貼付文を3段と突起直上にも施している。横走する沈線文の一部には上下線を連結させて、枠状になった施文手法を確認することができる。体部の文様帯では貼付文を2段構成で施し、中段には単位化した枠状構成の沈線文が認められる。この区画帯には大きな円形の剥落痕が認められ、瘤状突起が復原でき、注口部両端にも貼付文を施している。底部には網代痕を認めることができた。器面には入念な調整を施しており、胎土は粗い砂粒をわずかに含み、色調は黒褐色である。

本例は、沈線文を多条化させた文様構成によって、安行1式との併行段階に置かれる土器である。関連資料を県内で確認すれば、蓮田市ささら遺跡（橋本ほか1985：第59図2）、深谷市上敷免北遺跡（第13図4）、小鹿野町下平遺跡（小林ほか2001：第28図2.3）、熊谷市諏訪木遺跡（黒坂2002：第38図107）の出土例を挙げることができる。ささら遺跡の出土例は、頸部の内彎形態等から共通する特徴が認められ、頸部の沈線間には山状突起も配置されており、近接した時間的位置が考えられる。上敷免北遺跡の3号土壙から検出された2個体の出土例は、施文系列が異なった縄文施文と沈線文で構成する注口土器の共伴事例であり、組成化したあり方を確認することができる。さらに、下平遺跡2号住の一括資料には2個体の瘤付土器が含まれており、高井東式と安行1式との共伴事例によって相互関係を理解することができ、編年的位置と細別段階との関係を捕捉できる基準資料になっている。これらの施文構成を確認すれば、直線化沈線文と瘤状貼付文の施文要素では共通するが、沈線を連結させて枠状化した手法を認めるることは難しく、この相違する構成は時間差で捉えることも考えられ、高井東式や安行1式における口縁部文様の枠状化による影響も考えることもできる。

次に、安行1式の成立段階に位置する注口土器を涉獵すれば、千葉県下水遺跡20号住出土の一括資料に含まれた注口土器を挙げることができる（設楽2004：第50図13）。この土器は口縁部が直立した形態で、口縁部文様には突起と縄文帶を設けており、肩部には弧線文が瘤状突起を連結する文様構成になっている。この出土例が保有する弧線文構成の基準化によって、加曾利B式や曾谷式段階に置かれてきた既出例を型式学的に再評価する必要性も認めることがある。

30は頸部上半を欠失した注口土器である。頸部は直立しており、肩部からは曲線的に移行し、体



第3図 土 器 (2)

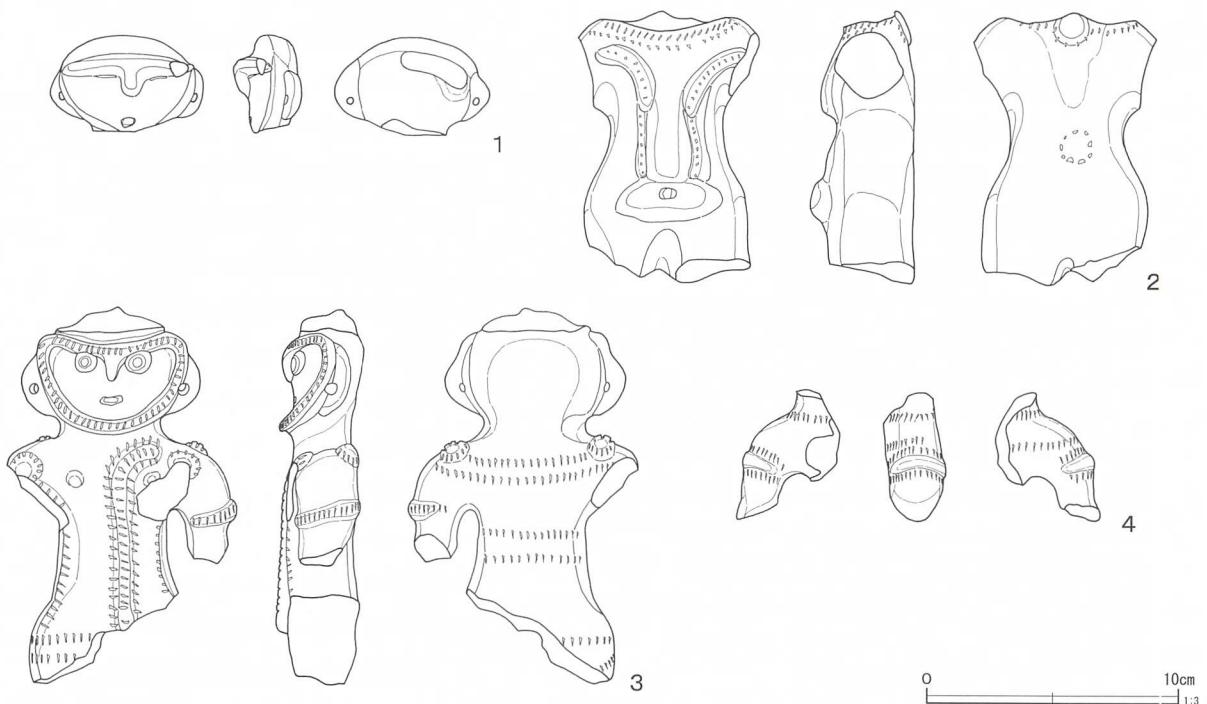
部下半の割合を高く設けた形態であり、底部は小さい上げ底になっている。頸部と体部中位には無文帯を挟む縄文帯を設けて文様帯を区画し、頸部の縄文帯には縦に切り込みをもった小さいボタン状の貼付文を等間隔で8箇所に置いている。体部には両側面に刺突を施した大きな突起を3箇所に配置することで器面を3区に分けており、突起間には2段の縄文帯を設け、上位では貼付文を規則的に3箇所、下位には2箇所施している。頸部文様帯は、弧線文を対向と背合わせで単位化させた文様を交互に配した構成である。肩部では、頸部を起点に弧線文が体部の突起に向かい、大きく対向した弧線区画を設けており、区画内には弧線文を組合せて入組文的構成で展開している。区画間には弧状化した縄文帯が連結して設けられており、その下位には頸部文様と共通する単位化した文様を施し、沈線の連結箇所にはボタン状貼付文を置いている。器面全体には丁寧な調整が施されており、赤色顔料の塗彩痕が認められる、胎土は粗い砂粒を含み、色調は黒褐色である。

この土器が保有する型式学的特徴を確認すれば、縄文帯で区画された頸部と肩部に設けた文様帯の構成であり、弧線文が弧線連結的に展開し、さらに単位的に置かれた文様構成と切り込みを特徴にした小さいボタン状貼付文を多用することである。こうした評価で、関連資料を確認すれば、東京都なすな原遺跡出土の注口土器が参考例になっており（重久1990：第294図2）、頸部と肩部に文様帯を設け、肩部には弧線文が木の葉状に構成する入組文的文様を確認でき、体部区画には刻目文を連動した3条沈線と突起を看取ることができる。入組文的構成やイボ状突起の有無の相違によって、本例に先行する時期に置くことが可能であり、編年的には曾谷式併行の比較資料になっている。次に弧線文が対向等によって単位化して構成する施文例を挙げれば、茨城県外塚遺跡（鈴木1985：第、-36図1）と福島県一斗内遺跡（山内1984：第37図11）からの出土例を抽出することができ、外塚例は磨消縄文で貼付文が付隨し、頸部文様は横帯文で構成しており、一斗内例は肩部文様帯内に施文された沈線文による構成である。こうした文様構成から本例を系統的に理解すれば、安行1式と高井東式に併行する段階に置かれることが考えられる。

31は台付浅鉢である。口縁には双頭と山形の突起を交互に配置しており、頂部に刻文を施す縦位の貼付文が連動する。突起間には下向きの弧線文が施され、3条沈線で構成する横帯区画に接している。区画帶中段の沈線上には2個一対のイボ状突起を置いており、区画内には連続刺突文を充填し、体部下半には連弧文を施文する。器面には光沢を備えており、胎土も緻密で硬く焼成され、色調は暗黒褐色である。

本例は、横帯区画に施した連続刺突文と2個一対のイボ状突起等を特徴にするが、これらは、東北地方の瘤付土器と共に通する手法であるが、浅鉢形態の器形で口縁部突起が付随する類例は希有な存在として指摘することができる。連続刺突文を施す土器は関東でも散見できるが、類例として抽出できる資料には、茨城県小場遺跡25号住出土の深鉢を挙げることができ（沼田1986：第20図40）、頸部の文様帯が弧線文で構成しており、本例は器部形態の制約から頸部文様の描出を省略し、本来は体部下半に施す弧線文を区画帶直下に置いたことが考えられる。さらに、栃木県藤岡神社遺跡（手塚1999：第170図1）、群馬県谷地遺跡（前原1982：第94図14）では、体部下半に連弧文を施した出土例を確認することができる。

本例の編年的位置を小林圭一氏の瘤付土器研究において確認すれば（小林2008）、小場遺跡例は刺突および刻文帯を多用する第3段階に含まれており、関東編年との対比では安行2式が古、新に区分された編年位置が示され、その古段階との併行関係で捉えられている。一方関東側では、安行2式は3段階の細別案が鈴木加津子（1983）、大塚達朗（1986）、新屋雅明（1991）の各氏によって提示されており、新屋氏は大宮台地から出土している瘤付系統の土器を集め、安行2式段階について触れている。先に確認した採集範囲では、下限期が鈴木氏の安行2式1b段階であり、本例と細別段階との位置関係は課題化している。



第4図 土偶

(2) 土偶 (第4図)

採集資料には4個体の土偶が含まれていた。これらも図示範囲との関連性は不詳であり、個別に保有する属性的特徴を確認することにしたい。

1は頭部で、やや厚手の造りになっている。頭頂部は平坦化が見られ、形狀的には橢円形に整えられており、顔部の上位には眉と鼻をT字状の隆帶で一体化させ、短く設けた鼻部表現を特徴している。眼は隆帶に沿って鋭い沈線で短く表現され、口は角棒状原体の押捺によって施している。耳部は穿孔が見られ、後頭部側から弧状形で設けており、後頭部の上位には隆帶貼付の剥落痕が認められる。表裏には入念な研磨を施し、胎土は精製されて緻密な質感をもっており、硬く焼成される。色調は暗褐色である。

本例が保有する属性的特徴を上野修一氏の土偶研究において確認すれば(上野1989・1991)、後藤遺跡3群第2類に含まれる頭部形状が扁平で耳部の一体化が認められるものと関連しており、4群第1類とされた類型との中間に位置することも考えられ、耳部形状に見ることができる属性的存在によって、別系統において理解する必要も想定される。

2は厚手で重量感をもった体部である。肩部の形状はなで肩であり、胴部は緩く括れ、腰部から脚部は直線化して移行するようである。体部正面では両肩部を結んだ細かい刺突文を矢羽根状に施し、両肩部からの高く設けた隆帶を彎曲させて乳房表現にしており、下位の一段低い隆帶と接続する。その隆帶は下降して、横長で誇張させた腹部に接しており、隆帶上には細かい刺突列を見ることができ、腹部中央には角棒状原体の押捺によって臍を表している。次に裏面を確認すれば、頸部の中央には扁平でボタン状の貼付文を置いており、肩部から延びる刺突列が接続し、貼付文の円周にも同様に施している。体部中央には刺突による円形文を単独に施すが、別種の施文原体が用いられている。刺突内には僅かに赤色顔料の塗彩痕が認められ、表裏には入念な研磨を施している。胎土は粗い質感をもつが、硬く焼成され、色調は灰茶褐色である。

本例は、顔部表現の不明な資料であるが、肩部から下降する隆帶による乳房表現、刺突文で構成

する文様手法、さらに裏面頸部に貼付文を施すこと、そして腹部隆帯表現等の多様な属性的特徴を保有している。こうした属性が認められる比較資料としては、上野氏によって型式学的分析が加えられた皆野町駒形遺跡の出土例を挙げることができ、胸部表現の隆帯手法は共通した属性を保有しており、山形土偶の最終段階に置かれ、ミミズク土偶への過渡的形態に含まれた後藤系列第4段階の曾谷式期に編年的位置が与えられている。さらに、脚部に施文された瘤状貼付文に注目することによって、「瘤付土偶」としての系列化において理解すべき必要性も指摘されている。

頸部に置かれた貼付文は、頂部を扁平にしてボタン状の特徴を示しており、駒形遺跡例の脚部に見られた瘤は、加曾利B式後半の深鉢や注口土器等に施された突起と共に頭頂が丸い形状になっており、手法的には共通したあり方ではあるが、別種の貼付文が採用されている。本例は高井東式の口縁部等に施文される形態との相関性が認められる属性要素になっている。

この部位に貼付文を施す類例としては、さいたま市小深作遺跡（三田村1990：第73図7）、群馬県北米岡遺跡（境町1978：第12図1）の出土例を確認することができる。北米岡例は胸部隆帯に刺突文を伴っていないが、顔部属性が確認できる好例になっており、駒形例とは異なった表現手法が採用されている。その手法は、眉表現の周縁部との一体化であり、後藤遺跡4群第1類に含まれるものである。こうした顔部表現のあり方からは、地域的に並列化した属性表現として展開していることが考えられる。この属性的特徴を有する類例に関しては、高井東式との連動で評価すべき対象として捕捉し、系列的理解と編年的位置において指標化できる土偶として位置づけておきたい。

3は脚部と腕部先端を欠失するが、ほぼ保有属性が把握できる資料である。頭頂部には欠損部が認められ、突起等の造形的存在が想定できる。頭部形態は橢円形であり、顔部は隆帯によって外周が縁取られている。眉表現は消失し、短く表された鼻は隆帯と一体化してY字状に近い形で設け、隆帯には鼻部を除いて縦長で鋭い刺突列が巡っている。眼は隆帯に接して瘤状の貼付文で表現されている。口は角棒状原体の押捺によって横長で表現され、耳部は後頭部側から弧状形に設け、穿孔を施している。肩部は曲線化したなで肩状の形で、上腕部は直線的に下降する。乳房表現は瘤状の貼付文で施しており、両肩部にも瘤状の貼付文が置かれ、その外周には刺突文が巡っている。左肩部からは隆帯が貼付され、下降して正中線になり、隆帶上と両側縁には細かい刺突文を施している。上腕部にも刺突列を施した隆帯を設けており、体側縁にも刺突列が認められ、腰部にも並列させている。裏面は平坦であり、両肩には正面と同様に瘤状貼付文を配置し、刺突文を施している。肩部と体部中央および腰部にも並走させた刺突列が区画している。全体的に入念な研磨が認められ、胎土は粗い質感をもつが硬く焼成されており、色調は灰褐色である。

本例が保有する属性的特徴は、土偶編年を考える上で基準化することも可能な構成を確認することができる。顔部表現に限っても、輪郭が隆帯で刺突列が付随することと、鼻部表現の一体化、瘤状貼付文による眼部表現であり、さらに頭部装飾の存在も想定できることである。こうした属性において資料的に評価すれば、ミミズク土偶の成立期に關係する地方系列的なあり方として捉える必要が認められることである。

この観点で関連資料を抽出すれば、栃木県御靈神社前遺跡（上野1995：図版5-9）の出土例を挙げることができ、頭頂部の前後には突起状造形が認められ、顔部周縁の隆帯化と刺突列が付随しており、裏面体部の多段化した刺突文の構成等によって、共通した手法属性を認めることができる。ただ、眼部表現は沈線手法が採用されており、胸部表現も隆帯手法によって相違した属性が存在することである。さらに、本例の保有属性である肩部の瘤状突起と上腕部の隆帯手法については、上野氏によって部位的存在として属性的に注意されてきたが、群馬県中栗須滝川II遺跡（古郡2002：第29図22）と栃木県八剣遺跡（上野2004：第42図92）からの出土例によって、顔部表現と手法的関係が把握できたことである。その眉と鼻は、T字状隆帯で一体的に表現された手法的属性を保有す

ることであり、本例とは相違した表現手法が採用されている点である。こうした共通する表現手法と相違点が併存している背景には、時間差のほか、地域展開が複系的になった手法系列の存在や継続的なあり方も視野に入れることも重要であり、上野氏や植木弘氏（植木1993：第1図3.4）が分析対象として抽出したミミズク土偶の初現形態である千葉県千代田遺跡例や同余山貝塚例等との比較研究を通じ、先に土偶2とした資料も含めて、資料的に蓄積が進んでいる関東北部における系列的展開を再確認すべき状況になってきている。

こうした資料的理解から、本例の保有属性と型式学的特徴において、「西城切通類型」としての指標化を行い、ミミズク土偶の初現形態との対比関係で捉えることにより、土器型式との関係を高井東式および安行1式期に編年的位置を措定しておきたい。

4は体側の右腕部に相当する。頸から腕部は曲線的であり、先端の一部を欠失するが、摘み上げた形状が確認できる。頸部には細かい刺突列が一巡し、上腕部には粘土紐の貼付によって隆帯を設け、両側縁に刺突文を施している。肩部背面にも直線化させた刺突文を見ることができる。胎土は粗い質感であるが硬く焼成され、色調は黒褐色である。赤色顔料の塗彩痕が認められる。

本例は、上腕部の隆帯と刺突列が保有属性であり、先に確認した土偶3とは手法的に共通し、肩部には瘤状貼付文の配置はないが、腕部形状を復原できる参考例になっている。

4 資料的位置

以上によって、西城切通遺跡の採集資料を紹介することができた。ここで遺物内容の資料的位置を総括的に捉えれば、後期後半に編年された高井東式土器の系列的理解と地域展開に連動した遺物構成であることが明らかになり、関東北部における地域的様相としての理解が、南部地域とは相違した位置に置かれることが再確認することになった。標本化できた瘤付土器の存在は、東北地方南部の土器群との関係を考察する上で参考資料にすることができ、高井東式と安行1式との細別段階における関係についても比較資料にすることができる。さらに、土偶が保有した属性的特徴の確認においては、ミミズク土偶の初現形態との関係性が課題化したあり方が認められ、地域展開が想定される手法属性や系列的理解の必要性などが分析視点になっており、その幾つかを抽出することになった。

この資料的位置から、高井東式期に関する県内動向について若干触れることにすれば、寄居町樋ノ下遺跡（細田1994）、桶川市後谷遺跡（末木ほか2005）では住居跡と土壙が検出されており、曾谷式併行に置くことができる土器群が出土し、細別段階における組成内容の検証を可能にする出土事例になっている。深谷市橋屋遺跡（高村1994）からは2軒の住居跡が検出され、時間差が認められる一括性の強い遺物が出土しており、安行1式との対応関係を把握することができる。さらに下平遺跡では先に触れた通り、住居跡からの一括資料は高井東式が主体を占めて出土しており、安行1式と瘤付土器が伴出事例になった検出状況からは、地域的なあり方と相互関係が明瞭になっており、さらには編年位置に関しても考究できる好材料が報告されている。諏訪木遺跡の報告では、多くの土器が標本化されており、系列的变化を分析できる資料内容を確認することができる。

こうした調査成果からは、地域特性としての把握と様相的理 解によって（市川1976）、型式学的分析と変遷過程を考察できる包括的状況が認められ、さらに、高井東式の編年位置も型式研究において学史的に整理されており（林2008）、広域的観点による系列的変遷が再提示されるなど、新たな研究展開に接することもできる。これらの動向により個別研究において触れるべき点もあるが、採集資料としての制約もあり、さらに同一遺跡内が調査されていることは重要である。後期後半の遺構と遺物が検出された成果を知ることができ、提示した資料範囲とは共時的であり、並列化した

資料状況と関連情報を含むことは明らかである。その詳細情報と状況的分析に基づく採集資料の再評価も遅くはないと考えている。

おわりに

本稿で紹介した考古資料は、その経緯から既に40年近い経過を示しているが、これまで、資料情報として取り上げられる機会が乏しい環境下に置かれてきた。近年の考古学的動向に関する地域情報として看過できない資料的位置を占めてはいたが、個人蔵であったことや寄贈資料として移動したこと、さらに確認作業の未着手等が背景になってきたものである。

このような経緯から、考古資料の専門的研究において補足する意義を認め、「前原儀久氏採集資料」として呼ぶことによって対象化の機会を設けたものである。作業範囲は個別説明に留まる内容で終始したが、有意義な考古資料としての標本化を行い、保有した属性情報の確認によって、分析研究に連なる定点設定の役割は済んだと考えている。

今後は、旧蔵資料の内容確認と併せ、旧妻沼町で周知化された遺跡との相関性を明らかにする手続きが必要になっており、地域史研究において存在意義を再評価することも重要である。

なお、末筆ながらご遺族の前原文枝夫人、並びに妻沼郷土研究会発足時からの会員であった堀越尚二氏には、貴重なお話をお聞かせ頂くことができました。さらに図化作業等にあたっては、故増田逸朗氏にお骨折りを頂いて実現に至ったことを明記し、学恩に対し深謝いたします。そして栗原文蔵、駒宮史朗、柿沼幹夫、安孫子昭二、笹森健一、並木 隆、鈴木正博、鈴木加津子、瓦吹 堅、上野修一、中島 宏、小野美代子、青木秀雄、鈴木徳雄、新屋雅明、利根川章彦、新井 端、西井幸雄の各氏には、様々なご教示とご協力等を頂いてきました。明記して感謝の意を表します。

註

- (1) 妻沼町は平成17年度の広域合併によって、熊谷市に編入されている。
- (2) 前原儀久氏は1927年妻沼町生まれ。実家であった妻沼聖天歡喜院に隣接した飲食店「美よし」を営みながら、「妻沼町歴史研究会」主宰していた。会の発足は1957年、顧問には当時県文化財審議会委員であった小沢国平氏が当たられ、毎月の定例会と見学会を行っていた。1974年に結成された「妻沼町文化連合会」の記録によれば、会員登録は23名である。
- (3) 1966年、店舗内に特別注文されたガラス製の物品棚を2台設け、集めてきた遺物を公開することになった。その横には採集地を配した札を置き、棚横の柱には「妻沼地方郷土考古資料館」と墨書した看板が掲げられた。これを契機に来店者等の関心を呼び、遺物の情報が増加することになり、しばしば現地に向かわれたとの事である。
- (4)埼玉県教育委員会では、1975年に『埼玉県遺跡地図—遺跡地名表—』を刊行したが、前原氏は妻沼町担当の調査員として委嘱を受けており、町内に所在する遺跡・遺物に関する長年の蓄積が反映されることになった。1974年に筆者がはじめて訪問した際、店内には資料館発行のB4版タイプ印刷の「妻沼町遺跡一覧」とした配布用の資料が置かれており、縄文から歴史時代の41箇所の遺跡が収録された地名表と位置図であった。
- (5) 奥様に、前原氏と考古学との結びつきをお尋ねしたところ、1960年代前半に岩宿遺跡発見者である相沢忠洋氏との出会いが契機になったとの事である。交歓の深まりの中で遺跡や遺物に関心が移ったそうである。
- (6) 1975年、妻沼町出身の学兄であった故増田逸朗氏に帯同して頂き、実測等についてお願いしたところ、特別な配慮をもって許して頂くことができ、図化作業等を進めておいたものである。
- (7) これらの遺跡を含め、町内所在の多くは前原氏によって確認されたものであり、採集された遺物は旧蔵資料に含まれていた。図化作業に併せ、縄文遺跡からの採集資料も確認することができ、ご教示を受ける機会もあった。
- (8) 行田市教育委員会の中島洋一氏の教示による。
- (9) 挿図化した範囲は、1975年当時に作成しておいたものを用いている。起稿に際し、熊谷市教育委員会蔵になっている採集資料を確認したが、特定できない資料も存在し、改めて図化等を行ったものではない。図化表現等に不備な点が認められるが、こうした事情もあり了承をいただきたい。

引用文献

- 新屋雅明ほか 1988『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 新屋雅明 1991「大宮台地における縄文時代後期末から晩期初頭の土器群について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 新屋雅明 1992『新屋敷東・本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 市川 修 1976『小山台貝塚』図書刊行会
- 市川 修・荒川 弘 1981『妻沼西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条理・道ヶ谷戸・飯塚南一』妻沼町教育委員会
- 市川 修・木戸春夫 2000『上敷免北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第248集
- 植木 弘 1993「安行式期土偶の研究 その1—山形土偶系統と遮光器土偶系統の展開—」『埼玉考古』第30号
- 上野修一 1989「北関東における後・晩期土偶変遷について（上）」『栃木県立博物館紀要』第6号
- 上野修一 1991「北関東における後・晩期土偶変遷について（下）」『栃木県立博物館紀要』第8号
- 上野修一 1995「栃木県」『土偶シンポジウム3 栃木大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- 上野修一ほか 2004『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第254集
- 大塚達朗 1986「安行1式土器構造論基礎考」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第5号
- 加藤隆則 2004『古宮／中条条理／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
- 金子正之 1988『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』熊谷市教育委員会
- 黒坂禎二 2002『池上／諫訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
- 古池晋禄・青木克尚 1997『市内遺跡群Ⅳ 上敷免北遺跡（第4次）』深谷市教育委員会
- 小林圭一 2008「瘤付土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 小林 茂・田部井功 2001『秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財調査報告書2』合角ダム水没地域総合調査会
- 埼玉県教育委員会 1975『埼玉県遺跡地図—遺跡地名表—』
- 埼玉県教育委員会 1990『埼玉県埋蔵文化財年報 昭和63年度』
- 境町教育委員会 1978『境町古代遺跡』
- 重久淳一ほか 1990『なすな原遺跡—No.1地区調査』なすな原遺跡発掘調査団
- 設楽博巳 2004『下水遺跡第1地点発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会
- 進藤敏雄 2000『御靈前遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告書第236集
- 末木啓介・藤沼昌泰 2005『後谷遺跡第4次発掘調査報告書 第2分冊』桶川市教育委員会
- 鈴木加津子 1985「安行3a式形成過程の一考察」『埼玉の考古学』埼玉考古学会
- 鈴木加津子ほか 1985『外塚遺跡』下館市教育委員会
- 鈴木敏昭 1999『横間栗遺跡』熊谷市教育委員会
- 鈴木正博 1980「『曾谷式』研究序説」「古代探叢—滝口宏先生古希記念論文集—」早稲田大学出版部
- 高村敏則 1994『橋屋遺跡』花園町教育委員会
- 手塚達弥 1999『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第197集
- 沼田文夫 1986『小場遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第35集
- 橋本 勉・市川 修 1985『ささらⅡ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集
- 林 克也 2008「高井東式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 古郡正志ほか 2002『中栗須滝川Ⅱ遺跡—縄文時代編—』藤岡市教育委員会
- 細田 勝 1994『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 前原 豊ほか 1982『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』藤岡市教育委員会
- 三田村美彦 1990『小深作遺跡—第3次発掘調査報告書—』大宮市教育委員会
- 村田章人 1993『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
- 村田章人ほか 1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 妻沼町誌編纂委員会 1977『妻沼町誌』妻沼町役場
- 妻沼町文化財編集委員会 1981『妻沼町の文化財』妻沼町教育委員会
- 山内幹夫 1984『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告16』福島県教育委員会
- 吉野 健 2000『寺東遺跡・別府氏館跡』熊谷市教育委員会
- 渡辺清志 2007『諫訪木Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集